

Live5

作曲講座

vol.2 ドラム・トラックの制作

統合音楽ツールとしての完成度を格段に高め、音楽制作の中核をなすソフトへと進化した独ableton社のDAW「Live5」。“録音&編集”“MIDI打ち込み”“エフェクト&ミキシング”機能はもちろん、“VSTとReWireに対応”といった拡張性、スピーディな作業を可能にする“リアルタイム性の高い操作感”などなど、作曲/パフォーマンスに不可欠な要素をもれなく網羅している。付録DVDビデオでは実際に曲を作りながら「Live5」の機能を紹介しているので、ぜひご覧いただきたい。

いよいよドラム・トラック制作

前回の「Live5」の概要に続き、今回からいよいよ制作に入ります。まずはドラム・トラックの制作。ここでは前回ご紹介した「Live5」付属のドラム・サンプラー音源「Impulse」(図1)を使った制作法を見てみよう。

画面左に“Liveデバイスブラウザ”を表示させ、“Instruments”フォルダ内の「Impulse」をダブル・クリックすればセット完了となる。もし任意のMIDIトラックに「Impulse」をアサインしたい場合は、そのMIDIトラックにドラッグ&ドロップすればよい。

「Impulse」には8つのボックスが用意されており、ここに音ネタをアサインしていく。もし、単発のキックやスネア、ハットなどの音ネタをお持ちなら、“ファイルブラウザ”からハード・ディスク内の音ネタにアクセスし、ドラッグ&ドロップすることでアサインが完了となる(図2)。また、例えばブレイクビーツなどのドラムループの音ネタから、キックやスネアのみを抜き出したい場合でも、音ネタをオーディオ・クリップとして取り込みファイルの発音部分を設定し、それを「Impulse」に取り込めるので、わざわざ別の波形編集ソフトを立ち上げる手間が省けるのだ。

さらに、「Impulse」にはエレクトロ系やアコースティック系の多数のプリセットが用意されている。これらはさまざまなジャンルに対応した高品位なドラムキットとなっているので、これらを使えばすぐに制作に入ることが可能となる。

アサインされた音を聴いてみたい場合は、「Impulse」のそれぞれのボックスについている再生ボタンを押せばよい。もちろんMIDIキーボードを使用して各ドラム・サウンドを鳴らすこともできるほか、

DVDビデオで一目瞭然!



M-SWIFT 松下昇平が、ブラジリアン女性ポータル曲を実際にLive5を使って制作!!

パソコンのキーボードを使って発音させることも可能(図3)。ノート・パソコンに「Live5」をインストールし、出先で制作を行なう場合など非常に使い勝手が良い。



図1:「Live5」付属のドラム・サンプラー「Impulse」8つまでサウンドをアサインできる。アサインされたサウンドのボリュームやパンを始め、ピッチやフィルターを個別に調整できるので、ここにドラム以外のサウンドをアサインさせても面白いだろう。



図2:画面左側の“ファイルブラウザ”から音ネタにアクセスし、画面下部の「Impulse」にドラッグ&ドロップしてアサインする。ループの音ネタなどは、いったんオーディオ・クリップとして加工してからアサインするとよい。クリップについては右ページ参照のこと。



図3: MIDI鍵盤がなくとも、パソコンのキーボードを鍵盤に見立てて音を鳴らせる。もちろんリアルタイムに打ち込みすることも可能だ。

快適MIDI打ち込み

“セッションビュー”(図2の右上部分。くわしくは前号参照。)の「Impulse」がアサインされたMIDIトラック上の“クリップスロ

create

produce

perform

連載予定

vol.1	Live5ってどんなソフト?	vol.4	ギターレコーディング
vol.2	ドラム・トラックの制作	vol.5	アレンジを詰める
vol.3	仮コード、ベース、歌入れ	vol.6	エフェクト/ミキシング



profile M-SWIFT

松下昇平が率いるプロジェクト。ジャズ、ブラジリアン、アフリカ、キューバを通過したそのサウンドは、ディープ・ハウス、ブレイク・ビーツなどクラブ・フィールドのさまざまな音像を飲み込みながら、新たな領域へ発展している。現在、2ndシングル、1stアルバムを制作中。



ableton Live5

対応OS : Windows 2000 / XP、
Mac OSX 10.2以上・
10.4対応

価格 : オープンプライス
(市場予想価格 :
5万2,545円前後)

問い合わせ先 :
(株)ハイ・リゾリューション
www.h-resolution.com



ット”をダブル・クリックすると、“MIDIクリップ”が作成され、“MIDIノートエディタ”があらわれる(図4)。わかりやすく言えば“クリップ”とは、音のフレーズのことで、「Live5」ではこれを作成しさまざまな“クリップ”を組み合わせて音楽制作を行なう。“クリップ”には、“MIDIクリップ”のほか“AUDIOクリップ”があり、音ネタのオーディオ・ファイルをAUDIOトラックの“クリップスロット”にアサインすれば“AUDIOクリップ”となる。

図4を見ていただくとわかると思うが、ここにはあらかじめ“Impulse”にアサインしたキックやスネアなどが並んでいる。“ドロモードスイッチ”(Live5上部の鉛筆ボタン)を押した状態で、“MIDIノートエディタ”をクリックしていくことで打ち込みを行なう。もちろん打ち込みは、他のパートの演奏を聴きながらMIDI鍵盤でリアルタイムに演奏しそれを記録することも可能だ。また、先ほどのようにパソコンのキーボードで発音させたものを記録していくこともできる。

図4の下部の棒は、各ノートのベロシティ(音の強さ)をあらわしており、これは上部では色の濃淡で表現される。

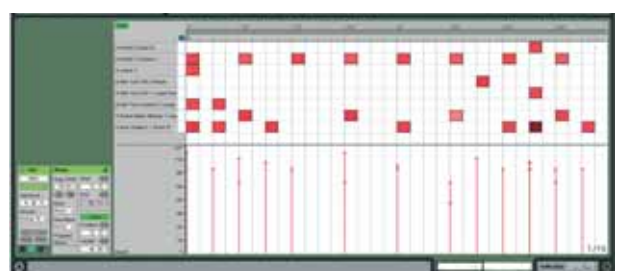


図4:「MIDIノートエディタ」。マウスでの打ち込み、MIDI鍵盤やパソコンのキーボードからのリアルタイム入力に対応。グループ感の調整やコントロール・チェンジを始めとする各種パラメーターを操れるので、高度なMIDI打ち込みが可能となっている。

クリップを並べる

“クリップ”を作成、加工し組み合わせていくことは「Live5」で音楽制作を行なう上での、大きなアドバンテージとなる概念のひとつだ。前述のように“クリップ”には“AUDIOクリップ”と“MIDIクリップ”があるが、これらの違いを意識せず“アレンジメントビュー”(図5)にクリップを並べていくことで曲を構築していくのだ。

“セッションビュー”から使いたい“クリップ”をドラッグして、“アレンジメントビュー”にドロップすることで曲の構成を作っていく。詳しくは付録DVD収録のビデオをご覧いただきたいが、ビュー画面を切り替える際は、パソコンのキーボードのTabキーを使って切り替えると便利だ。

また、「Live5」をリアルタイムに楽器のように演奏し、曲の構成をつけていくこともできる。これは「Live5」のシーケンスを走らせながら、“セッションビュー”の“クリップ”を鳴らしていくという方法で、その過程を記録させられる。記録されたものは“アレンジメントビュー”に自動的に並べられるので、あとで修正を行ないたい場合はこちらを使うことになる。“クリップ”を鳴らす際も、MIDIキーボードやパソコンのキーボードに“クリップ”をアサインできるので、まるで演奏するかのように曲を構築できるのだ。この機能はこれを使いたいがために「Live5」に乗り換えるプロ・ミュージシャンがいる程のもので、革新的で音楽的インスピレーションを呼び起こす機能といえる。

今回は仮のコードを入れ、ベースラインを仕上げていく。お楽しみに！

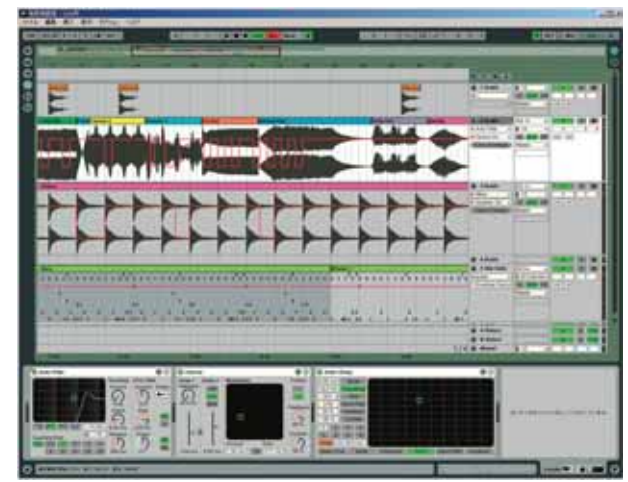


図5:“アレンジメントビュー”に“クリップ”を並べたところ。“AUDIOクリップ”の波形や“MIDIクリップ”の各ノートの様子を表示させられる。各トラックには、さまざまなパラメータのエンベロープを表示させ、簡単にオートメーションをかけられる。もちろんMIDIコントローラーを使えば、そのオートメーションもリアルタイムに記録できる。